

罪と贖罪の神話

～「シン・ゴジラ」「風の谷のナウシカ」から考える

「シン・エヴァンゲリオン劇場版：Ⅱ」～

追手門学院大学心理学部 溝部 宏二

1. はじめに

アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』（GAINAX Co. Ltd.→Khara, Inc. 庵野秀明監督）は、1995年10月から半年間テレビで放映されたものの、その「最終二話（25話・26話）」でも物語は完結しなかった（それまでの話の流れを全く無視した結末となっている所謂「夢オチ」）。そこで、様々な憶測や批判が集中した。解説本「エヴァンゲリオン快樂原則」（五十嵐編，1997）の中で大塚は、「現実と一切、切り離されたところで自己実現してしまう」と述べ、宮崎は「自己啓発セミナーやサイコセラピーの手法を物語の中に取り込んでいて、形を変えた癒しである」と述べ、ヒーリングや自分探しという共同体の幻想を憂いている。その後、1997年春に公開された映画「シト新生（DEATH&REBIRTH）」（テレビ版の回想と完結編映画の予告的内容）を経て、1997年夏に、テレビ版の最終二話をリメイクした形で（テレビ版の第24話に続く形式）、映画「THE END OF EVANGELION（Air/まごころを、君に）」が公開されて、ようやく完結し、さらに、修正されたDVDビデオソフトは、99年に完結（DVDのリニューアル版の完成は2003年）したという経緯がある。劇場版DEATH編は、映画「シト新生（DEATH&REBIRTH）」の前半部分で、テレビ版の回想であり、「総集編」という言葉が使われていることが多い様だが、これを見ればテレビ版の「あらすじ」が分かるというような作りにはなっていない。テレビ版を

見た人が、レビューとしておさらいをする形式の映画となっている（北村，2010）。また、TV版の上映に先駆けて1994年12月から連載されていた貞本義行による漫画版は、2016年11月に完結したが、概ね（旧）劇場版のストーリーを踏襲しつつ、物語が始まるまでの補足（新劇場版にて初めて登場する真希波・マリ・イラストリアスの正体が、碇ユイの大学の後輩と判明する）がなされており、多くのスピンオフ作品やパラレルワールドものと同様にエヴァンゲリオンは繰り返しの物語（ループもの）であることが示唆されている。

更に2007年9月に「エヴァゲリオン新劇場版：序」（以下「序」）が、2009年6月に「エヴァゲリオン新劇場版：破」（以下「破」）が公開され、2012年秋に「エヴァゲリオン新劇場版：Q Quickening」（以下「Q」）が公開された。新（シン）劇場版の完結編である「シン・エヴァンゲリオン劇場版：Ⅱ」（以下「Final」）は、2018年1月現在のホームページを見る限り「鋭意制作中」とある。ストーリーはTV版から（旧）劇場版を経る過程で、曖昧な点が明瞭にされることで観る者のファンタジーの介入部分が制限されている、所謂「まとまったお話」に向かっている。その傾向は新劇場版の「序」「破」でますます拍車がかかり主人公碇シンジ君の内面の成長物語「ビルドゥングスロマン（自己形成小説）」と言える、安心できる既成の枠内のお話となった感があった。しかし、「Q」に至ってその期待は見事に裏切られる。比較的了解可能なストーリーであった「破」の

後でありTVコマーシャルの攻勢も相まって「Q」の前評判は極めて高かった。シリーズ最高の観客動員と興行収入を上げた半面、よく分からないとの批判が殺到した。コアなエヴァファンは、分からないことを楽しみ、自分なりに解釈しようとネットの知識などを総動員して、「私のエヴァ」を構築する。しかし、コマーシャルの効果で、今までのコアなファン以外を取り込んだせいもあるだろうが、「Q」の理解し難さについて述べる者は公開から5年が過ぎた現在でも多い。新劇場版では、キャラクターや条件設定を変更する（主人公の名前や新登場人物の出現等）ことで、旧作との明らかな差異を呈していることが分かりにくさの元凶であろう。パラレルワールドやループものであれば、以前の作品と差異があるのは当然であり、その違和感も含めて受け入れなければならない（メタ・ポジションからの視点が要求される）。しかし、エヴァは、ループものであることを明言しておらず、物語の断続が分かり辛く連続ものとして鑑賞してしまう。筆者も新聞社からの依頼原稿のために、公開初日に鑑賞したのであるが、一度で咀嚼できずに即刻二度目の鑑賞を余儀なくされた。この複雑な「Q」を中心にTV版、(旧)劇場版、新劇場版の変遷を縦の糸（意図）に、エヴァンゲリオンのルーツの一つと考えられる宮崎駿監督の「風の谷のナウシカ（漫画版）」と「Q」の後に庵野監督によって制作され大ヒットとなった「シン・ゴジラ」を横の糸（意図）に、「Final」への展開を考えてみるという真剣な「遊び」を試みたいと思う。でもそこは精神科医であるので、この真剣ではあるが「謎解きの遊び」から早々に撤退して、若者のころについて考察を進めるのがシンの目的である。

※エヴァの新旧の表記の違いである「エヴァンゲリオン」「エヴァンゲリヲン」を、この小論では区別しておらず一律に「エヴァンゲリオン」と記載している点をご了承願

いたい。また、多くの「ネタバレ」を含んでおりその点も合わせて申し添えておく。

2. なぜエヴァンゲリオンは若者のころをとらえたのだろうか？

思春期を主に診療している精神科医である筆者は、新世紀を迎える辺りから、患者の口から「エヴァを観てください」「シンジくんは私そのものです」「人類補完計画があったら私の苦しみは無くなるのに」などの台詞を頻繁に聞く様になった。患者の内界を知る手掛かりになればと、推薦される映画やアニメ、漫画に書籍などは一応チェックするようにしており、エヴァンゲリオンもそうした作品の一つであった。いつもは軽くあらすじをなぞるだけのことが多いのであるが、エヴァにはハマったのである。(旧)劇場版から始まりTV版を全て視聴した。新劇場版は映画館まで足を運び、もちろん、全てDVDや漫画も購入した。エヴァンゲリオンは、社会現象となる程、多くの若者（一部の大人）の心をなぜ捉えたのであろうか？ よく言われているのは、謎解きの面白さである。ストーリーのあちこちにキリスト教・ユダヤ教・精神分析・進化論・脳科学・遺伝学などオタク心をくすぐる仕掛けがたくさんあり、仕掛けを調べるうちに、自分なりの「エヴァンゲリオンの世界観（ファンタジー）」を持つに至り「ハマる」のであろう（「ハマる」とは快感物質であるドーパミンが大量に分泌される状況であり、「薬物依存」や「ゲーム依存」など嗜癖と同様にA₁₀神経【エヴァとシンクロするのに必要】に関与する事象）。

しかし、その様なコアなファンが「すごいぜ！」と啓蒙しても爆発的人气となるには、普遍的関心を引く部分がなければ不可能であろう。ここでは、誰もが辿ってきた「発達」特に「思春期（青年期）の課題」に焦点を当てて「『わかもの』と青年期の発達課題の克

服過程」としてエヴァンゲリオンを観ていく。溝部が2012年に執筆した「新世紀エヴァンゲリオンにみる思春期課題と精神障害 ～14歳のカルテ～」(2012a)をベースに、その後の知見や「Q」で得られた見解を加えて解説を試みる。

思春期と青年期はほぼ同一の使用をされているが、ここでは多少厳密に区別してみる。世界大百科事典(第二版)によると、「思春期」とは、「第二次性徴の発現の始まりから成長の終わりまで」と定義されており、性的成熟に焦点を当てた医学的概念である。一方「青年期」とは、「性的成熟以外の心理的・社会的成熟も念頭にいたより広い観点にたつ」とある。大辞林(第三版)によると、青年期は、児童期と成人期の間で、14, 15歳から24, 25歳までで、思春期と呼ばれる前半で身体的・性的に成熟し、後半で自我意識・社会的意識が発達すると述べている。この定義によると14歳のエヴァパイロット達は、未だ「ころ」の十全な成長段階になく「身体的」成長段階まっただ中であると言える。

しかし、発達心理学者Erikson, E. H.の心理社会的発達理論(1959, 小此木訳 1973)では、それぞれのライフステージでそれぞれの心理的課題があるとする。エヴァンゲリオンでキーになる年齢は言うまでもなく「14歳」である。Eriksonの考えに基づくと、14歳の心理的課題は、「自我同一性の獲得」である(表1)。自我同一性の獲得とは、「自分が

どんな人間なのか」と言うことである。今まで親(大人)に与えられた価値観で生きて来られたが、性的成熟に伴い、新たな価値観の獲得が必要となる。この課題を達成できなければ、役割の混乱が生じ「自我同一性の拡散」状態となる。その結果、社会適応が上手くいかなくなるのであるが、非行などの行動障害は子ども時代に比べ複雑で広大な社会を前にして上手く対応することが出来ない心の叫びなのである。

この青年期の課題だけではなく、その前後の「児童期」と「前成人期」の課題も重要となる。「児童期」の課題の獲得に失敗すると「青年期」の課題達成は困難であり、「青年期」の課題の獲得に失敗すれば「前成人期」の課題達成は困難となるからである。「児童期」には、学校で急速に知識を得るとともに家族以外の仲間を得て世界を広げていく。その際、勤勉さを学び、達成する喜びと周囲からの承認や自尊感情を獲得する。しかし、勤勉さが足りないと劣等感を抱くに至る。「前成人期」には、異性との親密な関係を構築することである性行為を通じて、「心身ともに一体感」の体験を経験する。失敗すると、孤立することを余儀なくされるのである。

エヴァンゲリオンは、14歳の少年少女たちが「青年期の発達課題である『自我同一性』」を求めて奔走する物語であるとも言える。物語の中で、その獲得と失敗を繰り返すのである。もちろん、近年の客観的体系として構造主義や記号論的な観点から、「自我の喪失」は自明のこととされている。自我は「幻想」であり、個人は「体系=構造」の中に埋没する故に自我などという「核」は存在しないと考えるのがトレンドであるのは理解している。しかし、本小論では「罪悪感」「生命観」という主観的観点から考察を進めているので、このやや時代遅れとなりつつある「自我」の存在を自明のこととして述べたいと考えている。

区分	年齢	発達課題/危機	関係性
乳児期	出生～	基本的信頼/不信	母親
幼児期前期	1歳～	自律性/恥 疑惑	両親
幼児期後期	3歳～	自主性/罪悪感	家族
児童期	6歳～	勤勉性/劣等感	地域・学校
青年期	11歳～	自我同一性/役割拡散	仲間・ロールモデル
前成人期	25歳～	親密性/孤立	友人・パートナー
成人期	35歳～	生殖性/停滞 自己耽溺	家族・同僚
老年期	65歳～	統合/絶望 嫌悪	人類

表1 ライフステージと発達課題 (E. H. Erikson)

3. あらすじ（主に劇場版をベースに）

西暦2000年、南極で地球規模の大爆発（セカンドインパクト）があり、人類の半分が死滅した。同時に世界の気温が上昇し、海は生命が存在しない死海となった。2015年、人類（祖リリス：第2使徒から生まれ、知恵の実を食べし原罪を担うもの：別名リリン、第18使徒）は、その存在をおびやかす使徒（祖アダム：第1使徒から生まれ、生命の実を食べた？永遠の命を持ちしもの→「S2機関」を有する）と呼ばれる謎の生命体に対して、人造人間（アダム or リリスの肉体のコピーに人間の魂「コア」を宿し、14歳のパイロットが搭乗する）エヴァンゲリオンという科学力の粋（知恵の木の実の結果）とATフィールド（心という障壁）を使って戦っていた。アダムから生まれし使徒がリリスと癒合すれば大規模な爆発（サードインパクト）が生じ、人類は使徒により滅亡させられるのである。エヴァンゲリオンに搭乗するのは、碇シンジ、綾波レイ、惣流・アスカ・ラングレー等、母のない（孤独を抱えた）、14歳の少年少女たちである。そして、政府に疎まれながらも、全権を委ねられた特務機関NERV。だが、NERVと、その背後にある秘密組織ゼーレは、全ての使徒（17番目の使徒）を殲滅した後に発動すべく、行き詰まった人類を新たな段階に人工進化させる「人類補完計画」を画策していた。そして、両者の補完計画の間には、大きな違いがあり、最後の使徒の殲滅後、対立は決定的となり、全面的な武力衝突となる（ゼーレの補完計画は人類の手による滅亡にて贖罪を果たすこと、NERV【碇ゲンドウ】のものはエヴァをよりしろとして全ての人々の魂を集め単体として完全な生命体である神となること）。双方の「補完」が同時に進む中、どちらの補完計画にも必要なエヴァンゲリオン初号機のパイロット、碇シンジに全てが委ねられ、苦悩の末、彼は、どち

らの補完も肯定せず、もとの世界に戻ることを決意する。しかし、シンジの中途半端な気持ちで自分とアスカのみ肉体を実体化するにとどまって（他の人類は個としての形を失って融合したまま？）荒涼とした世界で二人だけが目を覚ます。ここに「新世紀」と共に「創世記」が始まるのである。

TV版も（旧）劇場版も、新劇場版も大筋は同一であるが、バージョン毎に物語の登場人物の性格や行動が微妙に異なっているので、その差異に基づいて結末（人類補完計画）が異なる展開を見せる。まるで「神」が地球という舞台上、碇シンジくんが考える「幸せ」を実現する世界を、渚カヲルくんというプレイヤーを介して実現可能か否かを繰り返しゲームしている印象を受ける。

4. 登場人物たちの人格傾向

エヴァンゲリオンに若者がハマるのは、登場人物が個性的でなおかつどこにでも居そうな設定であることも大きいのではなかろうか。観る者は、主人公の碇シンジ君だけではなく、それぞれの登場人物に感情移入して物語の中を共に生きる。アイドルグループのメンバーに感情移入して、自分だけの？「推しメン」を作るのと同様のハマり方であろう。前回の小論（溝部, 2012a）でも記載した主な登場人物の人物評（精神病理）であるが、今回は全体の「キャラ」の特徴を踏まえて人物について検討していく。

まずは個別の精神病理学的特徴について記載するが、今回は主要人物である「碇シンジ」「アスカ・ラングレー」「綾波レイ」の3人に絞って検討を試みる。アスカは、TV版・（旧）劇場版の「惣流・アスカ・ラングレー」新劇場版の「式波・アスカ・ラングレー」を含めて述べており、レイは、「初代・二代目・三代目の綾波レイ」、「Q」の「アヤナミレイ（仮称）」を含めて述べる。

（「碇シンジ」のカルテ）

基本情報：

14歳、エヴァンゲリオン初号機パイロット
（サードチルドレン）

診断名：

回避性パーソナリティー（障害）

鑑別診断：

社交不安障害、依存性パーソナリティー（障害）（依存型サイクロイド・パーソナリティー→「Q」：類境界型サイクロイド・パーソナリティー）メランコリー親和性格

生活歴・現病歴：

3歳時に母親を事故（エヴァ初号機に自ら取り込まれる）で失い、機を同じくして父親に捨てられる。叔父叔母（「先生」と呼ばれる人物が養育者との設定もあり）に養育されるが極めて自尊感情が低い子で、他者の顔色を窺うようになる（先生が養育者の場合は、比較的穏やかな家庭環境であるが、叔父叔母が養育者の場合は、厄介者扱いされかなり抑圧された幼少期を過ごす）。両親を悪く言われない為に、ひたすら良い子として振る舞う。自己の欲求を表出する事無く他者と親密な関わりを避けることで卑小な自己の傷付きを回避する様に生活してきた。しかし、父親が責任者（最高司令）を務める特務機関NERVに、「必要だから呼んだまでだ！」と冷酷な言葉と共に過酷な世界に引き出され、決断も着かぬままエヴァンゲリオン初号期のパイロットになる。

現在症・診断根拠：

青い（青臭い）プラグスーツに身を包む。「どうせ僕なんか」と拗ねた言動を繰り返し、重要な事項は他者に依存し、自己の判断を行わない。回避傾向がみられるのは、社交場面であるというより自己にとって重要事項であり、社交場面に限られると、「社交不安障害」として神経症圏（不安障害）と診断されるが、回避が「対人場面」に限られず大切な事は自分の判断で実施しないので、DSM-5

（American Psychiatric Association, 2013 日本精神神経学会監修 2014）で言うところの回避性パーソナリティー（障害）と捉えるべきであろう（「障害」をつけるかどうかは疑問だが）。批判、不承認あるいは拒絶に対する恐れが強く、「僕は人を傷つけることしか出来ないんだ」「だったら何もしない方がいい！」と、述べている。つまり、学校やNERVでの自分の評価を過度に気にするあまり、現実に圧倒されて無力感に捕らわれるので行動は「ひきこもり」となり勝ちなのである。回避する（逃げる）のが基本構造であるが、気持ちでは他者との関わりを希求する思いが活発で、「逃げちゃダメだ！ 逃げちゃダメだ！ 逃げちゃダメだ！」と自己の回避傾向を克服して自立的であろうとの思いがある点が依存性パーソナリティー（障害）との相違である。ここにシンジの葛藤が生じ、回避しながらも苦しむのである。牛島（2012）の考えでは、「対人場面で、相手を傷つけたのではないか、相手が自分のことをどう思っているか、軽蔑しているのではないか、と非常に過敏で、配慮がちな態度をとりやすいのである。これは、優勝劣敗に過敏で恥じの心理と密接に絡んだ人格のありようといってよいであろう。いわば自己愛の問題を秘めた人格である。」のであるが、自己愛性パーソナリティー（障害）の「尊大な自己愛」とは対象的に「過敏な自己愛」と言って良いであろう。

他の登場人物のキャラクターがある程度一定のパーソナリティー傾向を示しているのに、「Q」におけるシンジの豹変ぶりには驚かされる。ループものだから仕方ないと言ってしまえばお終いだ、サイクロイド・パーソナリティー（障害）が基本にあると考えると辻褄が合う。このパーソナリティー（障害）は、躁うつ病の病前性格とされ「躁」と「うつ」を循環するのである。基本的特徴は「社交性」である。意外に思う方も多いであろうが、シンジは「同調」を旨とし、対象と

一体化することに慣れている。TV版の第九話で、分離型の使徒を殲滅する際に、アスカ、レイとユニゾンの訓練を行うが、シンジはそつなくこなす。また、現在の自分が置かれた現状が過酷であり受け入れられない場合、自らの判断を停止して命令のまま動いている状況に対して、「人の言うことには大人しく従う、それがあの子の処世術だから」とリツコが語る場面がある。対象と一体化できていると「躁的：元気」なのだが、齟齬があると「うつ的：落ち込む」のである。「Q」以前のシンジは、サイクロイドをベースにして対象との強烈に一体化を求めて親や相当する人物に支援してくれるようメッセージを送り続ける「依存型」であったものが、「Q」では、対象との一体化体験が欠落し（ミサトやアスカから見放される）無力感から衝動行為に走っている「類境界型」へ変化していると考えたと理解しやすい。（旧）劇場版でもカヲルに対し、「裏切ったな、僕の気持ちを裏切ったな！」「父さんと同じに裏切ったんだ！」と激しい怒りを向ける場面でも同様の心性が垣間見える。類境界型サイクロイド・パーソナリティー（障害）での対象関係は、妄想分裂ポジション（Klein, 1946 小此木・岩崎訳 1985）である。妄想分裂ポジションとは、乳幼児では、瞬間瞬間の「快不快」が優先され、相手が同じ親であっても、自分の欲求を満たしてくれる「良い母親」と満たしてくれない「悪い母親」が別の存在であるかのように「分裂」を起こしている状態である。ここでの関係性は、部分対象関係と呼び、「白か黒か」「全てか無か」という二分法的思考である。その結果、思い通りにならないとき、それを周囲のせいにして、欲望を満たしてくれない周囲を悪者とみなし、悪者に対して敵対して、反撃を加えようとする状態である「躁的防衛」を実行する。成人の場合には、自己愛の問題を秘めた者が主に用いる姿勢と言える。このシンジの「人でなし」の行動は、シ

ンジがまさに人で無くなったこと（歳をとらない：永遠の生命を入手）を象徴しているのかもしれない。アスカが「人でなし」の自覚を持つのと対照的に無自覚であるのがシンジらしさと言える。「Q」以前のシンジは、「不快」なことが起きた時、その原因が自分にあるのではと考える姿勢を呈しており、相手の不快さも理解出来る（感情移入による共感能力）が獲得出来ている抑うつポジション（Klein, 1957 小此木・岩崎訳 1985）を示している。つまり、瞬間や部分だけでは無い、相手の恒常的で全体の姿が見えてくる全体対象関係を持つことが可能になり「白も黒も」と言った弁証法的思考を身につけている。「Q」のシンジは、「退行」して精神病状態に陥っていると言える。もう一点シンジの人格傾向を挙げるならば、うつ病の病前性格として知られている「メランコリー親和性格」（Tellenbach, 1974 木村訳 1978）ではなかろうか。病前性格とは、精神病になりやすい性格傾向であり、未だ「病的」とは言い難く一般人と共通の要素を持つものである。メランコリー親和性格の根本気分性は、「負債に陥ること」への気がかりであり、常に過失を犯すまいと配慮し続けている。その特徴として、「秩序への要求」と「几帳面さ」にあり、性格論としては、秩序への配慮により誠実・良心的・責任感・親切など「他人のためにある」を呈する。回避傾向にあるシンジに、責任感はずぐわなない感じがするが、「体面を取り繕う」ために「協調性」を重んじる彼の行動は責任感があると取られかねないと思う。**経過：**

薄情な父親の愛情を獲得したいと切に願い、同一化を試みるが得られず、エヴァ初号期（母親の魂が封印されている）に搭乗することで、母親の庇護の元自尊感情を高めることに成功する。また、それは父親が望む事でもあった。そうした過程を経て、父親を過度に恐れるエディプス葛藤を克服するに至り、父

親への自己主張が可能となる (Freud, 1909 総田訳 2008)。

また、同年齢の同性の友人 (トウジ、ケンスケ) との関わりがSullivan, H. S.の言う所のChumship (1953 中井訳 1976) として機能し、親代わりの (葛城ミサト、加持リョウジ)、異性 (アスカ) および親友 (カヲル) や母の面影を宿すレイとの濃厚な関わりで、エヴァ搭乗という非日常的関わりだけではなく、日常的関わりにおいても「自我の同一性を獲得」する後押しを得ることで、Maslow (1970 山口訳 1983) の言う「帰属感の獲得 (社会的欲求)」と相俟って青年期の課題を克服するのである。

(旧) 劇場版では、最終的には、妻から自立出来ない父親や人類の更なる可能性を求めて、エヴァ初号機の肉体とともに去っていく母親からの自立も果たす。また、他者を恐れるあまり他人との境界が無い世界を希求し、飲み込まれることを希望していたが、その願いを破棄して独りで立つ決意を固める。ラストシーンで「新世紀のアダムとイブ」となるべくアスカと廃墟と化した地球に立ち「新たな創世記」が発動する。ここでは、前成人期の課題である「異性との親密な関係を構築する」の萌芽がみられる。

(旧) 劇場版や「破」で「青年期」の課題を達成したはずのシンジが、「Q」では、すっかり振り出しに戻ったかの様に引き籠もる。その上、「大切な事は自分の判断で実施しないという特徴を持つ」はずのシンジが、「破」のラストシーンで自らの意志で「行きなさい！シンジくん。誰かのためじゃない。あなた自身の願いのために！」とミサトの声に後押しされながら、ゼルエル (第10使徒、TV版では第14使徒) に取り込まれた綾波レイを助ける主体的行為を行い、結果ニア・サードインパクトを引き起こす。これにより、「何もしないほうがいい」との彼本来の回避傾向が再燃したのであろう。しかし、そ

んなシンジは、根拠の乏しい情報で無謀な行動をするという今までの彼からは想像できない様相を呈する。カヲルが止めるにもかかわらず、リリスに刺さった2本の槍を引き抜きフォースインパクトが起きかける。この無謀な行為を溝部は、新聞紙上で「妄想分裂ポジション」にある行為と解説した (2012b)。しかし、新聞紙面の都合で筆者の意図が伝わりにくい短いものとなったので、映画を見た直後の感想 (不採用となった原稿) を引用する。

『エヴァンゲリオンを一貫して流れる思考に、「個別生命」と「普遍生命」の相克が存在すると考えている。特に3.11以降に作成された「Q」では顕著の様な気がする。今回、ヴィレ (個別生命: Bios, を守る立場) から攻撃されるネルフ (普遍生命: Zoé, を目指す立場) の碇ゲンドウに妙に肩入れしたくなった視聴者も多かったのではないだろうか？ ライオンキングのテーマ曲“Circle of Life”で歌い上げられる様にBiosとZoéが繋がり合うのが、定番の生命を取り扱う物語である。しかし、手塚治虫が「火の鳥」で、石ノ森章太郎が「サイボーグ009」で、永井豪が「デビルマン」で、さらに宮崎駿が「風の谷のナウシカ」で描くことを目指した「永遠の生命=神」と人類が対峙する (BiosとZoéがぶつかりあう) 世界へ、庵野秀明は足を踏み入れたと考えている。

(旧) 劇場版では、徹底的に回避し続けた回避性パーソナリティーの碇シンジくんに苛立った方も多いのではなかろうか。新劇場版で徐々に成長し「破」のラストシーンで自ら (みずから) 選んで、他者との「絆」を求める。健康なシンジくんは、私自身もホッとすると共に幼心 (餓鬼) が、「違うだろう！」と感じていた。彼は「個」としての自分 (自我同一性) を確立したのである。しかし、「Q」では、自ら (みずから) 選んだ行為が世界を破綻させかけたことが明かされる。それを非難されるのであるが、これこそ

が、シンジくんが最も恐れた世界である。そして、彼は「他人のせい」にするのである。精神分析で言う「妄想分裂ポジション」へ退行することで自分を守ろうとしているとも言える。「餓鬼シンジ」と言われる所以である。シンジくんの未熟な心の流れから考えれば、(旧)劇場版から「Q」へ続くほうが収まりは良い気がする(旧→「Q」：「序・破」と「Q」はパラレルワールド?)。アスカやミサトらヴィレのメンバーは、「個」を確立していると言う意味では「大人」となっている。「破」で、シンジくんの無茶を後押しした「餓鬼」のミサトが大人の感覚を身につけるのに14年の歳月が必要だったのであろうか？

TV版、(旧)劇場版、新劇場版と一貫しているのはゲンドウとカオルくんである。ゲンドウは他人を自分の欲望の為道具として使う自己愛性は相変わらずだし、シンジくんだけを見つめ、シンジくんの幸せだけを願いながら、シンジくんが今回も幸せになれそうにならないと分かったときにカオルくんは一瞬取り乱す人間らしさ？を垣間見せる。シンジくんが、個として自ら(みずから)選ぶ行為が、自ずから(おのずから)「原始に戻る」行為である人類補完へ変わっていくのであろうか？今後の展開が楽しみである。

※Evaのヘブライ語Chavvah(生命)をギリシャ語訳したのがZoéである』

「惣流(式波)・アスカ・ラングレー」 のカルテ)

基本情報：

14歳、エヴァンゲリオン式号機(2号機)
パイロット(セカンドチルドレン)

診断名：

演技性パーソナリティー(障害)および
PTSD

鑑別診断：

自己愛性パーソナリティー(障害)

生活歴・現病歴：

エヴァ式号機と接触実験中に母親惣流・キョウコ・ツェッペリンは精神異常を来す。仕事(NERVの科学者)で家族を省みなかった挙げ句、精神に障害を来した(式号機に「親心」を取り込まれたため、アスカに対する愛情を失ってしまう)ので、母親キョウコからの愛情を得ることが出来ない機能不全家庭で幼少期を過ごしたアダルトチルドレン(AC)が基本的性格特性を決めている。発狂した妻を捨て父親が再婚した継母(母親の主治医)との関係は表面的であり、愛情欲求が極めて強い反面上手く甘えられない。愛される為に過剰に頑張り、成功を追い求め続けるスーパーチャイルド(クリントン元大統領と同様)となる。14歳にして大学を卒業し、エヴァパイロットであるエリート意識が自我を支える根源である。子どもに対する愛情を失って抜け殻のようになった母親は自殺するのであるが、自殺した日が図らずもアスカがエヴァのパイロットに選ばれた日であり、喜び勇んで報告に来たアスカは絞首自殺した母親を目撃する。

現在症・診断根拠：

自我が無い(真っ白な)レイのプラグスーツが白であるのに対して、血の通う人間(生理が存在する女性)の象徴として赤いプラグスーツを纏っている。他者を見下し、自我境界を強化して何人をも寄せ付けないことで、本当は脆弱な自我が傷付くことを防衛している(張り子の虎)。機能不全家庭で育ったアスカは、「人類を守るエリートパイロットに選ばれたの、世界一なの。だから皆が優しくしてくれる」「寂しくなんかない」「パパがいなくても平気」「私を見て!」と、誰かに評価されることが彼女の生きる原動力である。アスカの表現型(人に見せている部分=コーピング)への友人らの評価は、「傲慢、高飛車、生意気、変わり者、我儘、見栄っ張り、冷淡、二重人格、バームクーヘン、薄情

者、自意識過剰、いけすかない女、いやーな感じ」と散々たるものである。他人と深くかかわることで傷つくことを恐れるがあまり、棘を出して（障壁としてのATフィールドを展開）いるアスカの姿が窺える。アスカは、ヤマアラシの様に棘で他者を遠ざけるが、一人では寂しく大人で自分を包んでくれそうな加持に思慕の情を寄せる。しかし、加持には受け入れられないので代理としてシンジに關心を寄せ、シンジの側に寄りたいたいのだけでも自分を傷つけそうな子供のシンジには近づけない「ヤマアラシジレンマ」が生じるのである。その葛藤する（自己愛性パーソナリティー【障害】ならスプリットしており葛藤は生じないか）姿が、「あんた、バカあ！」と「ツンデレ」に見えるのである。強迫的心性を持ち、無意識に存在するファンタジーとしての母親に強く影響されており、母親に圧倒された自我は強固なATフィールド（外的自他境界）により外へも漏れ出せず自閉するしかない。上記の特徴から、演技性パーソナリティー（障害）が最も考えられる。このパーソナリティー特性は、感情表現が大げさで、わずかなことで大騒ぎするが、いかにも芝居じみているというのが基本的特徴である。行動の背景として、「心の中に存在する空っぽ感」があり、「空っぽさ（バームクーヘンと揶揄されている）」というのは、本当の自分の姿を心の奥深く隠していることに由来する。アスカが、ミサトに対し、「生き方がわ

ざとらしい」と看破するが、この台詞はアスカ自身にも当てはまるのである。鑑別診断として、自己愛性パーソナリティー（障害）が考えられる。誇大的自己、賞賛されたい欲求、他者に対する共感性の欠如が特徴である。これもアスカに当てはまりそうであるが、自己愛性は「自分に対する並々ならぬ関心がある代わりに、他人に対する関心や思いやりが欠落する。アスカの他者に対して関係を希求する姿（ツンデレではあるが）は、演技性と考えの方が妥当であろう。演技性にしろ、自己愛性にしろ、これらのパーソナリティー障害は、大分類ではクラスターB（反社会性・境界性・演技性・自己愛性）に属するものである（表2）。これら劇的な症状を伴うパーソナリティー傾向がアスカの生きにくさの根源であると考えたと彼女の苦悩の深さが窺える。

また、母親の自殺場面を目撃するというトラウマ（外傷体験）を負い、フラッシュバックが出現し「私を捨てないで！」と現在でもトラウマを生々しく体験している。その意味では外傷後ストレス障害（PTSD）と診断出来るかもしれない。しかし、アスカの問題点はPTSD症状自体より、このトラウマにより幼少時から形成されてきたパーソナリティー特性（自己愛）に方向付けられた二次障害が生き辛さの本質であると考ええる。

経過：

エヴァとのシンクロ率が低下し、見下していたシンジに負けたと感じると、「もう私がいる理由もないわ」と、プライドを維持するために引きこもる場面がある。この引きこもるパターンは、周囲に圧倒された「卑小な自己像の傷つき」を回避するシンジのパターンと異なり、自己愛的で「誇大化された自己像の傷つき」を回避するものである。対処行動は似ているが異なる心性に基づくのである。

（旧）劇場版のクライマックスシーンでは、精神的に崩壊寸前の状態でエヴァに封印されていた母親の魂と再会（覚醒）し、支えられ

大分類	具体的タイプ
クラスターA (奇妙な)	妄想性、シゾイド(レイ)、シゾタイバルが含まれる。遺伝的に分裂病質を持っていることが多く、自閉的で妄想を持ちやすく、奇妙で風変わりな傾向があり、対人関係がうまくいかないことがある
精神病的	ストレスが重大に関係することは少ないが、対人関係のストレスには影響を受ける
クラスターB (劇的な)	反社会的、境界性(ミサト)、演技性(アスカ1)、自己愛性(アスカ2、ゲンドウ)が含まれる。感情的な混乱の激しい人格障害である。演劇的で、情緒的で、うつり気に見えることが多い。ストレスにかなり弱い傾向がある
中核群	
クラスターC (不安な)	回避性(シンジ1)、依存性(シンジ2)、強迫性、受動攻撃性、特定不能が含まれる。不安や恐怖感が非常に強い人格障害である。まわりに対する評価や視線などが大きなストレスになる傾向がある
神経症的	

表 2 チルドレン+αの人格特性

ている実感で健康な万能感（幼児的ではあるが）を得て立ち上がる。

新劇場版では、主要登場人物であるにもかかわらず名前が変更となっているのは何故であろうか？ 庵野監督は、「エヴァパイロットに関する設定を変えたので、それに合わせて整合性を持たせるのには名前も変えたほうがいいだろう」と語っているが、綾波・式波（敷浪）・真希波（巻波）は護衛艦からの命名であり、惣流（蒼龍）・赤木（赤城）・葛城・ラングレー・イラストリアスは空母からの命名である。母性から遠いものを空母（空っぽの母）名、母性に近いものを護衛（守る）艦名としている節があるので、キャラクターが「空母（蒼龍）×空母（ラングレー）」から「護衛艦（敷浪）×空母（ラングレー）」となり、設定がやや母性的に移行しているのであろうか。それ故「破」では、綾波が企画したシンジとゲンドウの仲を取り持つ食事会で、積極的に裏方を務めるなど「えこひいき」とライバル視していたレイとの関係や素直にアスカを慕う委員長洞木ヒカリとの交わりにてChumshipを獲得し、青年期の課題を少しずつ克服している。「Q」のアスカは、自我同一性を確立していて極めて常識的反応をしている様であり、大人になった感はあるものの、女性性は影を潜めている。しかしシンジに対して、大人になれきれない餓鬼シンジと疎んじながらもどこか憎みきれない素振りをみせる様子は、アスカらしいツンデレなのであろうが、相変わらず損な役回りである。アスカが、「破」で使徒に浸食されて使徒化しているとの見解があるが、基本心性は変化していないと考えられる。

（「綾波レイ【アヤナミレイ】」のカルテ）

基本情報：

14歳、エヴァンゲリオン零号機パイロット
（ファーストチルドレン）

診断名：

シゾイド・パーソナリティー（障害）

鑑別診断：

アスペルガー障害

生活歴・現病歴：

エヴァンゲリオン初号期に取り込まれた碇ユイをサルベージ（救助・回収）しようとしたが、魂は回収できず（ユイが自主的にエヴァに残ったため）肉体のみがサルベージされクローンが作成された。よって肉体のスペアは多数存在し、NERVの研究室にある培養液の中で成長する。魂はリリスのものが移植されている。碇ゲンドウによって創生されているため、唯一の絆であるゲンドウには絶対服従で主体性と言うべき自我は存在せず「零」である。しかし、シンジと接触するうちに、自我が芽生えてくる。また魂が人類の祖であるリリスのものであることから、人類共通の魂である「霊」であり「太母」でもあるので母性に目覚めていく。ゲンドウの右手に埋め込まれたアダムのものである肉体を取りこみ、リリスへ帰還して、アダムとリリスの癒合を果たす役割を担う、ゲンドウの人類補完計画のキーパーソン。エヴァ零号機のパイロットであり、零号機（アダムの肉体のコピー）には魂がコアとして取り込まれていないので、リリスの魂を持つレイがパイロットとしてエヴァとシンクロするのに必要だった（同じくアダムから造られた弐号機は、アダムの魂を持つカヲルには簡単にシンクロしてしまう）。

現在症・診断根拠：

白いプラグスーツや白い包帯に包まれている綾波レイの特徴は、まさに「零」であることであろう。「自分には（エヴァに乗る）他に何もない」「（これだけが）皆との絆」「私が死んでも、代わりはいるもの……」と圧倒的虚無感を纏っている。感情を表に出さず、パッと見何を考えているのか分からない無口無表情の赤い瞳の少女。多くの者が、神秘的なその存在に思わず引き込まれていく。

エヴァンゲリオンがヒットした要因の一つは彼女に存すると思われるのである。この特徴を精神病理学的に見るとしたら、シゾイド・パーソナリティー（障害）に近いと思われる。シゾイドの特徴は、周囲との世俗的な関わりを避け、超然とした生活態度を保っていることにある。世間体を気にすることなく、他人から規定されることを常に振り払っているかの様に見える。故に友人も少なく、孤立している様に見えるが、孤立を好んでいる様にすら見える。（対人関係から）ひきこもりながら、他者との関係を希求する回避性パーソナリティー（障害）と覚しきシンジとは異なる点である。また、感情表出の乏しさも特徴的で、人触りの硬さや冷たさを醸し出している。レイにそぐわないと考えられるのは、他人から規定されることを常に振り払う点であろうか、彼女が他者に吞み込まれる（浸食される）恐れを抱いているとは考え難いからである。

鑑別診断を挙げるとしたら、独特の対人関係からアスペルガー障害であろうか。アスペルガー障害の特徴は、コミュニケーションの問題」「対人関係の問題」「限定された物事へのこだわり・興味」である。レイにも他者の意図を理解せず（皆と考え方が違う）、対人相互反応の質的異常が存在する。これは、「心の理論：他者、自己の欲求、意図、信念等の心理的状況を把握する能力」の欠如が関与している。レイが利用する他者理解の方法は、心の理論（他人と自分は違う！）を前提にする「共感」ではなく、原始的で他者を地続き的に理解する方法である「共鳴」を用いていると思われる（溝部他，2016）。その特徴を最もよく表している名場面がある。シンジを守って瀕死の重傷を負ったレイを気遣い流涙すシンジに対しレイが言った言葉である。レイ「なに泣いてるの？」シンジ……レイ「ごめんなさい。こういう時どんな顔すればいいか分からないの」シンジ「笑えばいいと思うよ」である。この定型者にとって、

自明である暗黙の了解がレイには、分からないのである。シンジの心に思いを馳せること（共感）が出来ないレイの「対人関係の問題」に基づく孤独感が伝わる。言葉の裏や行間を読むのは得手ではなさそうなので、「コミュニケーションの問題」はあるかもしれない。しかし、アスペルガー障害の中核的特徴である、「こだわり」をあまり感じないので診断の決め手に欠く。

経過：

初代の綾波レイは、幼少時に赤木ナオコに殺害されているので、シンジに出会った頃のレイは二代目である。感情を表出することが無く、他者との関わりを求めようとしないシゾイドらしいレイが、シンジとの関わりで次第に、表情豊かで周囲の人物とも関わりを持つシゾイドらしからぬ変貌を遂げる。庵野監督の設定では、「感情の表現の仕方を知らないだけ」だから、学習したと理解できるであろう。するとレイの特性はシゾイド・パーソナリティー障害レベルではなく、シゾイド・パーソナリティーレベルであると考えられる。他の登場人物のキャラクターが比較的不変（シンジの豹変ぶりも説明は可能）であるのに、レイのキャラクター特性は明らかに成長するのである。第16使徒のアルミサエルが、零号機を浸食し、レイの心も浸食する。レイの心がシンジを求めることにより救援に来た初号機も浸食される可能性が出てきたため、ATフィールドを反転して零号機がアルミサエルを取り込み自爆する。シンジのために命を賭する究極の利他性を発揮する。三代目も、最初はよそよそしく、シンジを「あなた」と呼ぶが次第に親しみを込めて二代目同様「碇くん」と呼ぶようになる。遺伝子が似通うシンジ（実の子）との関わりで、感情の芽生えがあり（TV版や（旧）劇場版の後半。「破」ではその傾向がより顕著）、青年期の課題である「性同一性」「悲哀と空虚の体験」を経て「自我同一性の獲得」を果た

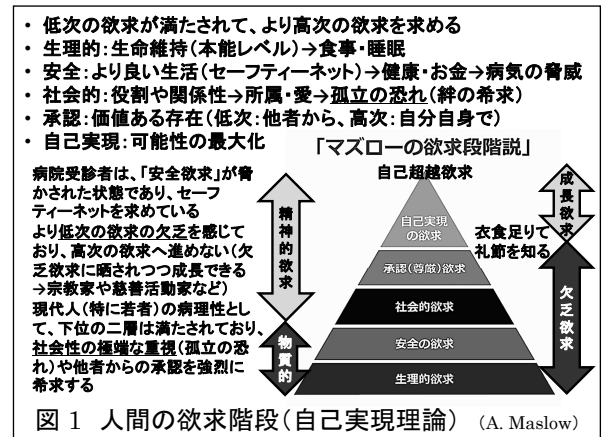
し、前成人期の課題である、異性？との「親密性」を経て、更に成人期の課題である「子供（シンジ）を導く」段階へ至る。最終的には、人類全てを包容し受容する大地の母である「太母」に目覚めるレイ（霊）なのであるが、シンジの自立（ひとつになる幻想「魂のルフラン」の破棄）を認めた後に終焉を迎える【(旧) 劇場版】。

「破」では、前成人期の課題の克服は認められるが、それから先は、ニア・サードインパクトが発動したため、カヲルがエヴァンゲリオンMark. 06に搭乗しカシウスの槍で覚醒したエヴァンゲリオン初号機を貫くので、三代目レイの成長も停止したものと思われる。「Q」で、冬月が「その娘も君の母親同様、初号機の中に保存されている」と述べている様に、「Q」で登場したアヤナミレイ（仮称）は、四代目レイと考えて良いのであろうか。綾波タイプの初期ロットとアスカに称される、アヤナミレイ（仮称）は、魂が一人にしか宿らなかった今までのレイとは異なるのであろうか。シンジの介入にもかかわらず、一貫してシゾイド的振る舞いをしているのが特徴的である。

（現代若者の人格特性）

「アイデンティティー」から「キャラ」へ

シンジ・アスカ・レイのパーソナリティーの特徴を上記で述べてきたが、「パーソナリティー：健康なパーソナリティー」か「パーソナリティー障害：病んだパーソナリティー」か、という相違点は重要である。人間は元来、遺伝的素質に規定される「気質」（回避性・依存性・自己愛性・演技性・シゾイドなど）を持って生まれ、様々な生育環境から与えられる精神的栄養や体験を経て「性格」が形成されて、「気質」と「性格」が相俟って「人格」が培われる。しかし、様々な心的外傷により「性格」が健全に生育できず本来の「気質」に歪みが生じることで「人



格」に問題を抱えるようになるので社会適応を欠く。これが、病んだパーソナリティー、「パーソナリティー障害」である。

社会適応を欠く傾向は、レイにはあまり見られず、シンジ・アスカには見られると考えて良いと思う（決して重症とは言えないが）。シンジ・アスカの人格特性は、対照的に見えるのだが共通する部分がある。それは、共に「他者の承認」を切実に求めている点にある。所謂「承認欲求」（Maslow, 1970 山口訳 1983）であるが、これは元来低次の欲求が満たされてから求める高次の欲求である（図1）にもかかわらず、彼らは「安全欲求」や「社会的欲求」より優先して切望しているかに見える。

現代の若者の人格特性を、斉藤環は「承認の病」（2013）にあると見なしており、「承認」を得るために「キャラ」という役割を作り出すと考察している。「キャラクターといっても、必ずしも『性格』を意味しない。

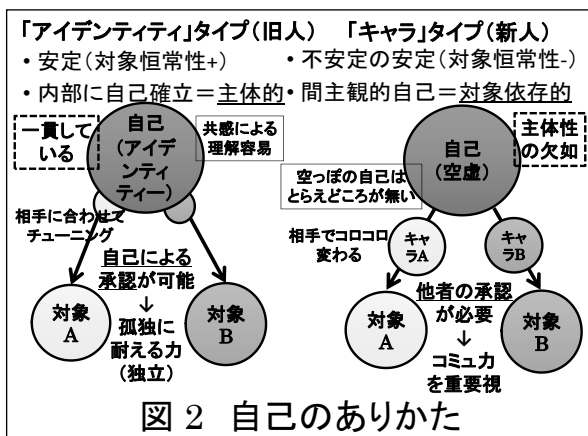
『キャラ』は本質とは無関係な『役割』であり、ある人間関係やグループ内において、その個人の立ち位置を示す座標を示す」と述べているが、ここでいう「本質」は本人の内面に確立した「アイデンティティー（同一性・自我同一性）」であるが、「キャラ」は「座標」にしかすぎないのなら「間主観的」に対象により変化する。よって対象恒常性を欠き、対人関係は不安定（常に他者からの承認を得ようとする）とならざるを得ない。こう

して、人と人との「あいだ」が、自己の本質より優先されているのである（図2）。つまり、対象により「キャラA」「キャラB」と使い分けるので、本人の本質（アイデンティティー）が見え難く、捉えどころがない。もちろん、従来の人々（旧人？）も対象に合わせてコミュニケーション方法は多少変更（共感・チューニング）するのであるが、本質は一貫しているので、「共感」を用いて相手を理解するのはあまり困難では無い。しかし、「共感」は私が、私の想像力の中で、感情移入という技術を用いて他者の意識の内を推論するに過ぎないので、共感的に理解した内容が真実であるかどうかなど誰にも分らないのである。自我同一性（アイデンティティー）獲得に失敗（同一性拡散）した、代償として「キャラ」を構築していると考えられないだろうか。現代哲学のトレンドである「自我の喪失」を実践しているのが「新人」であると感じる。自己自身は空虚であるが故に、この「あいだ」の操作に熟達した者が「コミュ力」という現代の魔法の杖を手にすることが出来る（新人？）。従来だと、同一性が拡散したら何らかの病的反応が生じたものであるが、「コミュ力」を手にするによって学校という閉じられた空間では、スクールカースト（鈴木、2012）上位層に君臨することが可能となった（世界が広がれば対象依存的適応に限界が生じる）。シンジ・アスカ・レイと三者三様だが、それぞれが「コミュ障」の

烙印を押されかねない不器用さを備えている（そういう意味では、三者は旧人である）。筆者にエヴァを教えてくれた精神科思春期外来を受診する若者に、この「コミュ障」が多いのである。彼らの「本質・アイデンティティー」ではない末梢のスキルの部分で苦しんでおり、自らと同じ悩みを抱える登場人物に自分を重ね合わせていると考えている。しかし、承認は他者からではなく、自らが与えるのがより高次の承認である。自らに承認を与えられる様になれば、「コミュ力」なるものは、たいした価値は無くなり魔法の杖に見えていたものがただの棒きれにすぎないと気づくのであるのであるが、そこにしか居場所がないと考える若者にとって居場所を確保する「コミュ力」は過大評価されたままなのである。

5. 風の谷のナウシカから新劇場版を考える

宮崎駿監督作品「風の谷のナウシカ」に登場する「巨神兵」のデザインを担当したのが庵野監督であり、エヴァンゲリオンやアダム（光の巨人）のフォルムが巨神兵に似るのは当然であろう。「風の谷のナウシカ」は、アニメ情報誌に1982年2月から連載開始され1994年3月に完結している。大ヒットし何度もTVで放映されている映画版の公開は1984年3月であるから、原作と言われる漫画版の完成は映画の公開よりはるかに後である。よって、漫画版の結末は映画からは計り知れない奥行きがある。「Q」の冒頭に「巨神兵東京に現わる」というショートムービーが挿入されているが、これは「風の谷のナウシカ」の設定時代の1000年前に「旧世界」で勃発したと伝えられている最終戦争で、人類の命運を委ねられ「調停者にして戦士でもある裁定の神」となった巨神兵が、調停の結果文明を崩壊させる裁定を下し、プロトンビー



ムを用いる戦士として破壊を实践した「火の七日間」踏まえているのは明らかである。漫画版の扉に毎巻（第2巻を除く）に、「ユーラシア大陸の西のはずれに発生した産業文明は 数百年のうちに全世界に広まり 巨大産業社会を形成するに至った 大地の富をうばいとり大気をけがし生命体をも意のままに造り変える巨大産業文明は 1000年後に絶頂期に達し やがて急激な衰退をむかえることになった 『火の七日間』 と呼ばれる戦争によって都市群は有毒物質をまき散らして崩壊し 複雑高度化した技術体系は失われ 地表のほとんどは不毛の地と化したのである その後産業文明は再建されることなく 永いたそがれの時代を人類は生きることになった」（宮崎，1982）との世界設定は、現代の世界とセカンドインパクト後の世界を彷彿させる。

漫画版のナウシカのあらすじを説明すると、火の七日間以降、人類は腐海という瘴気をまき散らす植物が蔓延する世界で、腐海周辺のわずかな土地を巡り争いを繰り返す。しかし、腐海は汚染された世界を浄化することを目的として旧人類が作ったものだったのである。クライマックスシーン（宮崎，1994）にて、今の世界は旧人類が侵してしまった環境破壊や宗教、戦争などにより混沌とした状況を1度リセットしようと考えた者たち【エヴァでのゼーレ】が描いた筋書き通りであり、永い浄化の時【インパクト】を経て「青き清浄の地」が復活した際には、遺伝子操作を施され人為的に腐海に適応させられ清浄な世界では生きていけないナウシカたちの種族に替わり、あらかじめ墓所に保存されている穏やかで完璧な別の種族【地球の正当な支配者であるべき使徒の特性を備えた人類】に入れ替える計画【人類補完計画】である。その事実を知ったナウシカは、人類の進化と可能性について語る旧人類が残したシステムに向かって「苦しみや悲劇やおろかさは、清浄な世界でもなくなりはいしない。それは人間の一部だ

から……」反論する。「私達の身体が人工で作られ変えられていても、私達の生命は私達のものだ、生命は生命の力で生きている。その朝（※筆者注：滅亡の日）が来るなら、私達はその朝にむかって生きよう」と主張する。巨神兵の生き残りであるオーマは、ナウシカと調停を図り、旧人類が墓所に保存している「新世界」の種である「新人類」ではなく、今を生きているナウシカ（達）に加担する裁定を下し、戦士として墓所を破壊する。

神の計画した観念的な「生命そのもの：Zoé」の存在より、「今を生きる個別の生命：Bios」を通してしかZoéが存在する意味は無いとの見解を示しているのが「風の谷のナウシカ」なのではなかろうか。

6. シン・ゴジラから新劇場版を考える

ゴジラは、言うまでもなく日本が生んだ怪獣界の大スターであり、1954年に第1作が作成されてから「昭和ゴジラシリーズ1～15作」「平成ゴジラシリーズ16～22作」「ミレニアムシリーズ23～28作」「シン・ゴジラ、アニメ版」「ハリウッド版2作」が上映された。シン・ゴジラは、2016年7月に公開され、庵野秀明が脚本と総監督を務めた（庵野，2017）。初代ゴジラは、ビキニ環礁水爆実験により太古の生物が、「怪獣」となり文明を破壊するという、タイムリーな話題を絡めて近代文明の在り方を問う極めてメッセージ性の強い作品として生まれた（本多，2014）。「核の落とし子」「人間が生み出した恐怖の象徴」という煽り文句でも示される様に、「人間が環境を変え、海や大地、空気を汚染している」との警鐘と罪悪感が根底に存在する。初代ゴジラを観ると心のどこかに自責の念が生まれるのは筆者ばかりでは無いであろう。シリーズ化の中で、そのメッセージ性は希薄になったり多少色濃くなったりしながら経緯してきたのだが、ゴジラは、ビキニ

環境で生まれた出自は共通していた。シン・ゴジラは「各国の放射性廃棄物の無秩序海洋投棄」により「太古から生き延びた海洋生物が放射線に耐性を持つ生物に変化した」と新たな設定になっているので、シリーズとしてのゴジラの連続性は途切れる形となっている。庵野監督は、連続性を断ち切っても「新たな（シン）ゴジラ」の存在意義を求めたのであろう。

シン・ゴジラは生物として完成度が高く、いかなる攻撃にも耐えうる力を持っており、単為生殖で無数に増殖（凍結されたゴジラの尻尾から分離間近の子ども【人型：第5形態】が出芽しかかっている様は、リリスから出芽するリリン【人類】を彷彿させ、ヒューマノイド：哺乳類？への進化を予感させる）し、短時間に環境に合わせて進化する。魚類？：第1形態→両生類：第2形態→爬虫類：第3・4形態→哺乳類？：第5形態と「個体発生は系統発生を繰り返す」とのHaeckel, E.の反復説を孵化後？に系統発生の進化を実現しているの、進化は留まることを知らないのであろう。そこで国連は、人類がゴジラにより絶滅させられる前に東京で、「人類の叡智の炎である熱核兵器を使うしか救いの道はない」と判断する（この場面で「ゴジラより怖いのは私たち人間ね」との台詞があり、TV版や（旧）劇場版そして「破」でNERV本部が戦略自衛隊に攻められる際に「やはり最後の敵は同じ人間だったな」との冬月の台詞と重なる）行為から、人間の愚かさを徹底的にあぶり出す。同時に、ゴジラは「陽子数が少ない物質を取り入れて細胞内の元素を必要な分子に変換して、その崩壊エネルギーを利用する生物である」からどんな場所でも生きていける（永遠の生命の獲得）。その力を人類が手に入れば、「ゴジラは人類の存在を脅かす脅威であり、人類の無限の可能性を示唆する福音であるということ」と、ゴジラ＝福音（エヴァンゲリオ

ン）との新たな視点を展開している。福音を素直に受け取るとすると、ゴジラの利用する放射性同位元素は半減期が20日程度なので、放射能汚染された東京の復興に光を見いだし、「荒ぶる神の力を解放して、試したかったのかもしれない、人間をこの国を、日本人を、核兵器使用を含めて」と結んでいる。ここに庵野監督の祈りにも似た人間観を伺う事が出来る。「祈り」と筆者が感じたのには訳があり、前半の行政官僚に依存する為政者の駄目さぶりを見せつけられた後に、「人間・この国・日本人」に可能性を見いだすのは、神にも祈る想いでもなければ無理であると深い絶望を突きつけられたからである。

そう考えると、半減期20日という楽観的結末も、2011年に生じた日本人にとって未曾有の大災害「東日本大震災」での福島第一原発の放射能汚染源であるセシウム137の物理学的半減期が30年で、現実の復興には数十年単位の時間が必要なことと鮮やかなコントラストが浮かび上がる。しかも楽観的予想とは裏腹に、凍結されたとはいえ都心に屹立するゴジラの像は、いつ再開するか分からない「恐怖」と人類の「罪」の象徴として存在し続けるのである。「戦士にして裁定者」であるゴジラの活動再開はあるのだろうか？ また、ゴジラと「調停を図れる」ナウシカは現れるのでしょうか？ここでも、「かすみを食っている仙人みたい」に生き永らえることが出来る、永遠の生命体（生命の実を食べし者）であるゴジラというZoéに対して、限りある命を生きるしかないBiosである人間（知恵の実を食べし原罪を生きる者）が叡智を用いてどう立ち向かうのかが問われている。

7. TV版から劇場版へ、そして新劇場版に続くテーマ：「人類補完計画」

2018年1月現在のエヴァンゲリオン公式サイトでは、夏と思しき青空が夕日に染まり始

めている背景に「続、そして終。非、そして反。」との文字が浮かんでいる。多くのファンが推測している様に、「シン・エヴァンゲリオン劇場版：Ⅱ」のタイトルは、「エヴァンゲリオン新劇場版：序」と同様であると素直に読めば「Ⅱ」は反復記号であり「終わりのなき物語」を予感させるが、「Ⅱ」と読むと、終止線で、まさしく「Final」である。「続、そして終。」から一応の結末を迎えるが、それはループものでもあることが示唆されているのであろうか。「非：それ以外」でかつ「反：それとは反対」という接頭語としての意味があり、英語では“Non- and Anti-”となる。TV版や（旧）劇場版それに漫画版など、今までの物語とは結末が違うことを表しているのかもしれない。

また、エヴァンゲリオン全てのシリーズの根底に流れるテーマに、「永遠の命（生命の連続性）」と「個別の命（生命の一回性）」の関係性に対する問が存在する様に思う。前述の様に、「風の谷のナウシカ」や「シン・ゴジラ」でも同様のテーマが色濃く存在している。木村（1994）は、古代ギリシャの生命哲学を引いて、生命をBiologyの語源となる、ある特定の個体としての有限の生命をBiosと呼び、Zoologyの語源となる、個体の分離を超えて連続する生命であるZoéと呼ぶ事象から「個人の生命としてのBiosを扱う生物学的精神医学」と「個人の生活としてのBiosを扱う人間学的精神医学」に分類しているが、そして両者の根底には、無限定のZoéが存在するのだが、それは、対象「モノ」として認識出来ない行為「コト」であると理解している。木村は、統合失調症をZoéからBiosへ至る連絡が絶たれて個別化が阻害された状態（主体性を喪失する）と理解しており、依存症はBiosからZoéへ至る連絡が絶たれた個別化（孤独感）を物質により回避し一体化を図っていると説明している。

このテーマは手塚治虫のライフワークでも

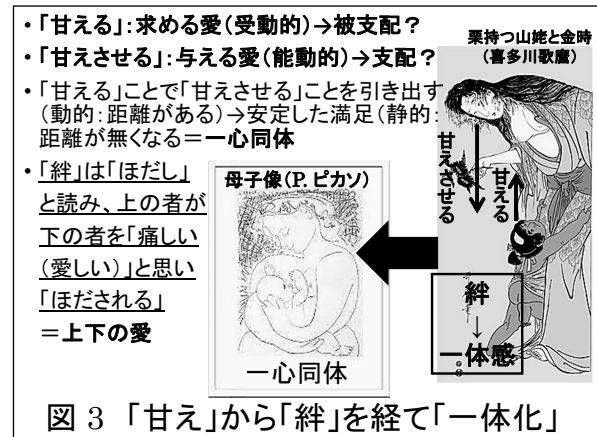
あり未完に終わる「火の鳥」（1992）にとってもよく現されていると思う。火の鳥（不死鳥）はZoéの実体化であり、個物・Biosとしての猿田彦が永遠の生命を求めZoéとの出会いと別れを、時空を超えて繰り返す物語であると考えられるのではなかろうか。

それでは、エヴァンゲリオンとの関連はどうであらうか。エヴァにおけるZoéを象徴するものは、永遠の生命を持つ使徒であることは明白である。それに対応するものとしては、個別的生命を生きるしかない人類がBiosを象徴する存在である。「知恵の実」のみならず、「生命の実」まで手に入れ神に匹敵する力を得ようとする行為がエヴァの「覚醒」と言えるのではないだろうか。エヴァが神として覚醒すると、新たな世界を創生する機会が生まれるのであろう（シン・創世記）。（旧）劇場版では、ゼーレの「人類補完計画」である、神に匹敵するエヴァの力を利用してすべての人類が自我境界であるATフィールドを崩壊させ、個別の生物（Bios）が、「原罪」を犯す前の生命の根源（Zoé）に戻るため「ガフの部屋」（魂が住む神の館にある生命が生まれ帰っていく場所）の扉を開いて「贖罪する」。NERV（ゲンドウ）の「人類補完計画」である、ガフの部屋ですべての人類が一つとなり、他者を傷つけたり他者から傷つけられたりするのを防ぐATフィールドを消失させ、単体となることで孤独や対人関係で悩むことのない完璧な平等性と絶対的なメンタリティーを獲得（「知恵」と「永遠の命」と「揺るがない精神力」）するから、「神になる」ことを目指している（単体の生命そのものとして、ATフィールドが無いので、ゲンドウはユイと離れることは無い：究極の同一化・一体化）。ゼーレのもNERVのも、補完計画は同じ結末となるのであるが、目的が異なるのである。「人類補完計画」とは、個別の生命体としてのBiosを捨て去り、生命そのものであるZoéとして人類を進化させるプロ

ジェクト「シン・創世記計画」と呼べるものである。

TV版や（旧）劇場版での「人類補完計画」は、他者との関係に傷つくことを恐れるシンジの願いによって一旦は発動するが、「ここには僕が居ない」と再びATフィールドが存在する、他人の恐怖（Absolute terror）が始まることを了承する。つまり、他人とは絶対に完璧には分かり合えないが、分かり合えるかもしれないとの希望を持ち（祈り）生きていくと決心する。自我同一性の確立（青年期の課題達成）である。「真実は人の心の中にある」「新たなイメージがその人の心も形も変えていく」「唯、人は自分自身の意志で動かなければ何も変わらない」とのリリス（レイ）とアダム（カヲル）とユイからのメッセージを受け取り、シンジの決断はさらに固まりゼーレの補完計画もゲンドウの補完計画も失敗に終わり、人類の融合は中断する。つまり、「風の谷のナウシカ」や「シン・ゴジラ」と同様に、シンジはBiosとして個別の生を粛々と生きていく決断をするのである。それでは、新劇場版ではどうなるのであろうか？「非、そして反。」であるなら、人類はZoéとして、新たな生命体として最出発するのではないだろうか。つまり「人類補完計画」が発動すると考えられる。しかし、そこには「人類補完計画」が遂行されない世界の可能性も示唆されると推測する。

エヴァとパイロットの関係を考える時、「一体感（一心同体）」を目指していると考えている（対象関係論者だと、「エヴァ＝母」と「エントリープラグ＝ファルス」を用いて子どもが母親とSexするファンタジーと考えるであろう）。親子が一心同体となり、子ども（親も？）は満たされて常ならざる力を発揮する。これは、エヴァとのシンクロ率が低下しているアスカにレイが言った「エヴァは心を開かないと動かないわ」に象徴されている。図3で示す様に、子どもの「甘



え」に呼応して母親が「甘えさせる」と親子の一体感が生まれる（「甘えさせる」≠「甘やかす」：甘えさせる＝相手の希望を叶える、甘やかす＝自分の希望を叶える）。ユイの立場から考えると、シンジくんの成長を促進する関わり（甘えさせる）が極まると「エヴァは覚醒」し、シンジくんをスポイルする関わり（甘やかす）が「エヴァの暴走」に繋がっている印象を持っている。また、この「母子一体化」の延長線上に「人類補完：全ての人類が一体化する」が存在すると考えて良いのではないか。エヴァとパイロットの関係性こそが、「人類の理想」とゲンドウが考えている究極の同一化（人類補完計画）の雛形である。

8. 罪と贖罪そして再生

エヴァンゲリオンは、登場人物がそれぞれの「こころの傷」を抱えている。上記で主に検討してきた「親からの自立 vs 親との同一化」と「Bios vs Zoé」以外に「罪悪感」も重要なテーマであることは間違いない。その中でも「人類の持つ原罪」の処理はエヴァ最重要問題の一つなのであろうが、神または超越者に対する罪悪感は後述するとして、まずは「倫理的罪悪感」から述べてみる。倫理的と言うには、「私が他者に対する行為の結果生じる罪悪感」となる。「他者に対する罪悪感」とは、道徳法則や義務に背反したため

に引き起こされた罪悪感であるよりも、むしろ自己が他者に対してなした加害の行為者であることを自覚することによる罪悪感である（久重忠夫, 1988）。エヴァでは登場人物の罪悪感がそこかしこに散りばめられているが、一例を挙げると「アスカ：シンジってなんだか条件反射的に謝ってる様に見えるのよね。人に叱られない様にさ！」「シンジ：ごめん」「アスカ：ほらあ！ 内罰的過ぎるのよ、根本的に！」などである。ここで述べられている様に表現型でいえば、アスカは「外罰的（他罰）：自己のフラストレーションを外部のせいにして非難する」でシンジは「内罰的（自罰）：ものごとが上手くいかない結果を自分のせいにする」である。先に挙げた「妄想分裂ポジション」と「抑うつポジション」に相当する。しかし、他者に対して「罪悪感を持つこと」「罪を認めること」は決して容易では無い。精神分析の主題でも「罪」は大切なテーマであり、人は「罪」を自覚する恐ろしさを直視することが出来ず、代りに様々な症状を出現させる。日本人は安易に「済みません」と述べるのであるが、「済みません」と言うことで「済んだ（澄んだ）こと」にしてしまう傾向を持つ。日本人であるシンジのそんな傾向を、半分ドイツ人であるアスカは不思議に思い、上記の様な会話になったのであろう。アスカは「他者に対する罪悪感」を、自己愛を守るために否認しており、シンジは認めているという差異は存在する。アスカの罪悪感は、基本的には「神」に対して生じ、シンジの罪悪感は「（自らを含めた）人」に向かうのではなかろうか。しかし、アスカが「条件反射的・人に叱られない様にさ」と看破している様に、シンジの持つ罪悪感の本質的に「他者に対する罪悪感」と言えるのであろうか。先に示したメランコリー親和性格の特徴を、木村（1972）は「人前での体面を傷つけられる様な状況に陥ること、あるいは対人関係における負い目を負わされる

立場に立つことを極度に恐れる」と述べている。この心性は、純粹に他人のためになるというよりは、自己中心的な他人への配慮となると考えられる。「他人のために他人に尽くす」というよりは「他人に尽くすという自分の有り様を変更すること無い様努力する」が主題となり、シンジの罪悪感も自己愛的なものに過ぎないのである。では、どうすればこの自己愛的罪悪感を他者に対する真の罪悪感に変換出来るであろうか？ここで、観無量寿経（2015）で語られる「王舎城の悲劇」を参考にして考察する。詳細は割愛するが、残虐非道の阿闍世は、父親である王を殺し母親まで殺そうとするが、母親の愛情にて自らの罪を認めて救われる物語である。阿闍世に生じる「罪の意識」を「慙愧懺悔」と表現している。慙愧は、恥じ入ることであり、懺悔は、過去に犯した罪を神仏や人の前で告白して許しを請うことである。阿闍世は、父親殺しを恥じて慙愧の念に堪えかねて自暴自棄になってしまう。浄土真宗に深く帰依していた古澤（1954）は、「慙愧」を外から強いられた、処罰恐れ型の「罪悪感」と呼び、「懺悔」を他者からとろかされる事で自発的に生じる、許され償い型の「懺悔心」と呼んで区別している。これは、エディプス・コンプレックスと阿闍世コンプレックスの対比となっている。エディプス・コンプレックスは、息子が母親を愛し父親を憎むと言う、愛欲を巡る葛藤に由来しているが、古澤が提唱した阿闍世コンプレックスは、前エディプス期に参与する概念であり、エディプス・コンプレックスよりもっと本質的な自己の出生の由来あるいは生命の根源である自己の成り立ちに関するコンプレックスである。古澤は、「近親相姦と父親殺しをテーマとするエディプス・コンプレックスに対して、母親殺しと未生怨をテーマにする点に阿闍世コンプレックスの独自性がある」と主張しており、「母を愛するが故に母を殺害せんとする欲望」＝阿闍世コンプレックス

レックスを提示したのである（小此木・北山, 2001）。懺悔が生じている状態では、自暴自棄になる様に自分を裁いている自分が観ている（芹沢・武田・今津, 2010）。自分を分裂させることで、部分対象的観点である「白か黒か」との二分法的思考から、全体対象的観点である「白でも黒でも」との弁証法的思考への転換（相対化）が図られるのだと考えられる（奥村, 1985）。エヴァにおいてシンジくんが、真の罪悪感である「懺悔」に至には、理由はどれあれ自己の信念のために幼いシンジくんを捨ててエヴァに自らの意思で残った母親ユイに対する恨み（目の前で母親が消えてしまった記憶が消されているので思い出す必要がある）をしっかりと見据えて、（旧）劇場版のラストで式号機の中でアスカに生じた、母親との癒合（一体感）を初号期の中で体験するか、もしくはレイと癒合する必要性が生じる（人類補完計画の始動）。この成長（結末）により、（旧）劇場版のラストシーンで、シンジは納得して母親から自立可能（人類補完計画の中止）となったのである。

次に「原罪」についてであるが、宗教とりわけ一神教に疎い日本人にとってあまり馴染みのない概念である。そもそも、ゼーレが考える「人類補完計画」とは、原罪を贖罪することにある。TV版のタイトル“NEON GENESIS EVANGERION”は、「新世紀」と記載されているが「新たな創世記＝シン・創世記」という意味である。創世記は言うまでもなく旧約聖書最初の書であり、「天地創造と原初の人類」に関する内容を含んでおり、「エヴァが蛇にそそのかされてアダムを誘惑してエデンの園の中央にある知恵の木の実を食べさせ、『神のように善悪を知る者』となった結果、神の呪いを受けエデンの園を追われる失楽園」が原罪の原型となる（日本大百科全書 1993年版）。原罪に関する理解は、ユダヤ教、カトリック、プロテスタント、ギリシャ正教のみならず派閥によって

も異なるので、部外者である筆者には語るべき言葉もない。しかし、それらに共通して流れる思想にAugustinus, A. (1913 金子訳 1979) が述べる、「自然の善き能力を暗くし弱めている罪悪は、そのため召命と治癒が必要なのであるが、罪のない制作者による由来しているのではなく自由な意志決定によって犯した原罪から生じている」が背景にある様に思う。ここには、「人間は神の加護がない限り罪の奴隷である」と「人間は誰から強制された訳ではなく、自らの意志で罪を犯した」という考えが存在するのであろう。エヴァンゲリオンのテーマとして「知恵の実（神が食べることを禁止）を食べ原罪を有する」人間と「生命の実（神が食べることを許可）を食べた」使徒の主導権（地球の支配権）争いがあるのだが、神に背いた人間が神の意志に従う使徒に勝利して生き延びる「義」はあるのだろうか。しかも、その罪は誰に強制されることもなく自ら行いながら、アダムはエヴァにエヴァは蛇に責任転嫁して反省することが無い。人間にとって分が悪い気がする。しかし、ここでナウシカの台詞を思い出して欲しい。「苦しみや悲劇やおろかさは、清浄な世界でもなくなりはいしない。それは人間の一部分だから……。だからこそ、苦界にあっても喜びやかがやきもまたあるのに」と。人間は原罪と共に生きるべきであり、愚行を繰り返すのが人間であるとの思考が宮崎監督には存在する。そして「生きることとは変わることだ！」と、不変不滅であるZoéではなく、「いのちは闇の中のまたたく光」であるBiosこそが生命の本質であると述べている（もちろん、Biosの延長線上にZoéは存在するのであるが、この観念的・宗教的？Zoéという生命観に対するアンチテーゼでもある）。宮崎監督の生命観・倫理観を、庵野監督が了承するなら、エヴァンゲリオンの「Final」では、贖罪は行われなければならないはずである。シン・ゴジラでは、贖罪は取り敢えず

「凍結」されて結論は延期されているのだが、庵野監督は今度こそ決着をつけるのであろうか。

9. おわりに

新劇場版には、作品毎にサブタイトルが付いている。ストーリーには、NOTありのバージョンとNOTなしのバージョンがあると想定できる仕組みであろう。「序」：YOU ARE (NOT) ALONE. 「破」：YOU CAN (NOT) ADVANCE. 「Q」：YOU CAN (NOT) REDO. である。「序」は、母親がエヴァに取り込まれた後叔父の家で「ひとりぼっち」で過ごしたシンジくんが、チルドレンやNERVのメンバー、第3新東京市第壱中学校2年A組のクラスメートとの出会いでYOU ARE NOT ALONE. が達成されているバージョンである。「破」は、ミサトの「行きなさい！シンジ君。誰かのためじゃない。あなた自身の願いのために！」との台詞に象徴される様に、回避傾向の強いシンジくんからの脱却が描かれている。典型的ビルドゥングスロマンとなっているので、YOU CAN ADVANCE. のバージョンである。「Q」は、自らの選択がサードインパクトの誘因（ニア・サードインパクト）となり、人類の大量絶滅を引き起こした失敗を取り戻そうとセントラルドグマの爆心地に残る二本の槍をリリスから引き抜く。しかし、世界は修復されることなくフォースインパクトが開始する。カヲルくんの犠牲的行為にてインパクトは中断するが、やり直すことが叶わなかったバージョンであるので、YOU CAN NOT REDO. と言える。エヴァンゲリオンのメインテーマは、「シンジくんが幸せになれるか否か」という単純な話を壮大な仕掛けでゲームの様に繰り返す物語であると筆者は考えているので、上記サブタイトルから「シン・エヴァンゲリオン劇場版：Ⅱ」のサブタイトルを考えてみた。YOU CAN (NOT) BE HAPPY. などは如何であろうか。

そして、一人のエヴァファンとして、エンディング曲は、「Ⅱ」が色濃い結末ならば、「親子の絆を求めて一体化を図るテーマを持つ：魂のルフラン」で締めくくり、「Ⅲ」が色濃い結末ならば、「自我同一性を獲得して親から旅立つテーマを持つ：残酷な天使のテーゼ」で締めくくって欲しいと願うのである。そうした観点から言えば、(旧) 劇場版のラストでは「残酷な天使のテーゼ」が流れてもよかったのであるが……。 「子どもの自立を喜ぶべき：残酷な天使のテーゼ」であるテーゼと「いつまでも子どもと一緒に居たい：魂のルフラン」であるアンチテーゼの葛藤を母親のユイは如何に統合（アウフヘーベン）するのであろうか？ この物語は、シンジくんの母親である碇ユイの成人期の発達課題である、「次世代の人生に責任を持ち、良きものを次世代に託す：世代性」の克服過程でもある。果たして、ユイがシンジくんの自立による旅立ちを喜べる結末を迎えることができるのだろうか、また繰り返すしかないであろうか。

10. 引用文献

- American Psychiatric Association (2013).
Desk Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-5. American Psychiatric Pub. Inc. Washington, D. C. (日本精神神経学会監修 (2014). DSM-5精神疾患の分類と診断の手引. 医学書院)
- 庵野秀明監督 (2003). Neon Genesis Evangelion Death (True) 2 : Air/まごころをきみにキングレコード
- 庵野秀明監督 (2009). エヴァンゲリオン新劇場版：序 (EVANGERION : 1.11) キングレコード
- 庵野秀明監督 (2010). エヴァンゲリオン新劇場版：破 (EVANGERION : 2.22) キングレコード

- 庵野秀明監督 (2013). エヴァンゲリオン新劇場版:Q (EVANGERION:3.33) キングレコード
- 庵野秀明監督 (2017). シン・ゴジラ 東宝
- Augustinus, A. (1913). *Natura et Gratia*, ed. C.F. Urba et I. Zycha, *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum* Vol. LX, Lipsiae (アウグスティヌス, A. 金子晴勇訳 (1979). アウグスティヌス 著作集9 教文館)
- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. International University Press, Madison (エリクソン, E.H. 小此木啓吾訳編 (1973). 自我同一性—アイデンティティーとライフサイクル 誠信書房)
- Freud, S. (1909). *Analyse der Phobie eines funfjahrigen Knaben*. Fischer, Frankfurt (フロイト, S. 総田純次訳 (2008). フロイト全集 (10). ある五歳男児の恐怖の分析 (ハンス) 岩波書店)
- 久重忠夫 (1988). 罪悪感の現象学 弘文堂
- 本多猪四郎監督 (2014). ゴジラ (昭和29年作品) 【60周年記念版】 キングレコード
- 五十嵐太郎編 (1997). エヴァンゲリオン快樂原則 第三書館
- 木村敏 (1972). 人と人との間 弘文堂
- 木村敏 (1994). 心の病理を考える 岩波書店
- 北村正裕 (2010). 完本 エヴァンゲリオン解説 そして夢の続き 静山社
- Klein, M. (1946-1955). *The Writings of Melanie Klein Vol.4 Envy and Gratitude and Other Works*. Hogarth Press, London (クライン, M. 小此木啓吾・岩崎徹也編訳 (1985). メラニー・クライン著作集4 妄想的・分裂世界 誠信書房)
- Klein, M. (1957-1963). *The Writings of Melanie Klein Vol.5 Envy and Gratitude and Other Works*. Hogarth Press, London (小此木啓吾・岩崎徹也編訳 (1985). メラニー・クライン著作集5 羨望と感謝 誠信書房)
- 古澤平作 (1954). 罪悪意識の二種—阿闍世コンプレックス, 精神分析研究, 1 (1) (オリジナル1934 長陵)
- Maslow, A.H. (1970). *Motivation and Personality*. Haper & Row, New York (マズロー, A.H. 山口忠彦訳, (1987). 人間性の心理学. 産能大出版部)
- 宮崎駿 (1983). 風の谷のナウシカ Animege comic ワイド版 第1巻 徳間書店
- 宮崎駿 (1994). 風の谷のナウシカ Animege comic ワイド版 第7巻 徳間書店
- 溝部宏二 (2012a). 新世紀エヴァンゲリオンにみる思春期課題と精神障害 ～14歳のカルテ～ 追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要, 8, 42-57.
- 溝部宏二 (2012b). クロスレビュー 映画「エヴァンゲリオン新劇場版:Q」朝日新聞12月5日
- 溝部宏二・中川彩華・南浦由佳・清澤亜希子・赤根美結・子日康史・藤井崇央・大川恵莉子・松原彩乃・末代咲恵・加藤宏明 (2016). にこにこ教室最終講義 ～心理臨床における主体性を育む療育プログラム実施の意義:「積極的見守り」姿勢の獲得～ 追手門学院大学心の相談室紀要, 13, 35-70
- 小此木啓吾・北山修偏 (2001). 阿闍世コンプレックス 創元社
- 奥村二吉 (1985). 原事実について 岡山大学医学部神経精神医学教室
- 齊藤環 (2013). 承認をめぐる病 日本評論社
- 佐藤春夫訳 (2015). 観無量寿経 筑摩書房
- 芹沢俊介・武田定光・今津芳文 (2010). 阿闍世はなぜ父を殺したのか ボーダーインク
- Sullivan, H.S. (1953). *Conceptions of Modern Psychiatry*. W.W. Norton &

Company Inc. New York (サリヴァン,
H.S. 中井久夫,山口隆訳, (1976) 現代精
神医学の概念. みすず書房)

鈴木翔 (2012). 教室内カースト 光文社

手塚治虫 (1992). 火の鳥 (角川文庫) 全13
巻 角川書店

Tellenbach, H. (1974). Melancholie, 2e ed.
Springer Verlag, Berlin (テレンバッハ,
H. 木村敏訳 (1978). メランコリー み
すず書房)

牛島定信 (2012). パーソナリティー障害と
は何か 講談社